

高齢者のための住宅改修に関する基礎的研究, その2

名古屋市・江南市における高齢者の住居内移動についての意識調査

久保 智恵子・高橋 啓子

A Fundamental Study on the Housing Renovation for the Aged, Part 2

- Survey on the Evaluation of Passages in Dwelling Spaces for the Aged in Cities of Nagoya and Konan -

Chieko Kubo, Keiko Takahashi

1. 研究の目的

在宅福祉において、高齢者の自立した生活を支援する上での必須要件としては、各種ケアサービスと共に、高齢者が一日の生活の大半を過ごす住宅の安全性の確保が上げられる。毎年、住宅内での転倒により死亡事故が起きており、「スリップ、つまずき及び、よろめきによる同一平面上での転倒」、「階段及びステップからの転落及びその上での転倒」による死者数（65歳以上）は、1134名（平成13年度）になっている現状である。⁽¹⁾このような事故の減少を目指して、住宅内移動の安全性を高めることにより、高齢者の生活動作は拡大し、介助の軽減にもつながると考えられる。

そこで本研究では、高齢者にとってより良い住宅改修とはどのようなものであるかを再考し、適切な住宅改修により高齢者の自立した生活を支援することを目的としている。今回は高齢者のための住宅改修、特に住宅内移動の安全性の確保に関する改修の実態に焦点をあてて、高齢者自身へのアンケート調査を行い、住環境の実態と高齢者の意識、高齢者の抱える問題点等を把握分析した結果を報告する。

2. 研究の背景

平成14年度より始まった介護保険制度を利用した住宅改修も要介護度の低い高齢者を中心に増加の傾向にあり、給付決定額（月額）を平成12年4月から6ヵ月ごとにみると以下のようになる。⁽²⁾

平成12年4月分	18200万円	平成12年10月分	165100万円
平成13年4月分	206700万円	平成13年10月分	269400万円

平成14年4月分 292000万円 平成14年10月分 318400万円

介護保険制度が始まって3年、住宅改修に関しては保険制度開始以前の住宅改修とは質量共に変化し、介護保険に係わる全く新しい分野の住宅改修が始まったと言っても過言ではない。この制度が導入されたことにより「高齢者の自立した生活を支える場としての住まいのあり方を考える」ことが飛躍的に発展し、福祉住環境コーディネーターの活躍の場もおおいに広がった。また、一人ひとりのライフスタイルや身体的ニーズ、生活ニーズにあわせた住まいづくりをし、住まいを単なる「器」づくりから「生活支援としての住まいづくり」とする考え方も定着してきたが、またいろいろな問題点も浮き彫りになってきた。

3. 調査概要

調査対象は、名古屋市と江南市に在住する65歳以上の高齢者であり、平成13年7～8月に、各市の老人クラブの会長に依頼し地区在住の高齢者に直接配布し、郵送にて回収した。配布数は270名（名古屋市160名・江南市110名）、回収数は238名（名古屋市130名・江南市108名）、回収率は88.1%であった。しかしこの期の回収では男性の数が女性より多く、比が約7：3とアンバランスであった。そのアンバランスを是正するため平成15年6～7月に江南市とその周辺在住の65歳以上の女性を対象として再調査を行った。家族または知り合いに高齢女性がいる本学学生等に依頼し、配布回収を行った。配布数は60名、回収数は56名、回収率は93.3%であった。

4. 結果および考察

(1) 調査対象者の属性

調査対象者の居住地、性別、年齢、居住形態、建築・改装年代、家族形態は、表1に示すとおりである。性別についてみると2期目の追加調査により男女比が約7：3から6：4と近づいたが、男性の方が若干多くなっている。年齢構成をみると65歳以上75歳未満の前期高齢者と75歳以上の後期高齢者の比率はほぼ同率となっている。居住形態は持家がほとんどであり、建築・改装年代は昭和41～60年が一番多くなっている。家族形態は子どもとの同居が55%であり、夫婦のみの家族より多くなっている。居住地による対象者の属性のちがいをみると、性別では、1期のアンケートでは両地ともほぼ男性7割女性3割である。年齢をみると名古屋市では後期高齢者が約6割と多く、江南市ではほぼ同率となっている。居住形態は、名古屋市の15%がマンションその他である以外は戸建て住宅である。建築・改装年代は名古屋市のほうが若干古い住宅が多くなっている。家族形態をみると、名古屋市では夫婦のみが5割を超え、江南市では子どもと同居が7割を超えている。2期のアンケートを江南市とその周辺で行ったため、本報告では居住地別の分析については深く言及していない。

健康状態については、「日常生活に問題がありますか」の問には、表2のように83%が良好・問題なしと答えている。また、住宅内の移動に関して細かい項目を聞いたところ、住宅内の歩行能力については、ほとんどの人が一人で歩けると答えている。住宅内の階段の昇降に

表1 調査対象者の属性 a ~ f (単位:人 総数294)

a. 居住地

名古屋市	130
江南市	164
無回答	0

b. 性別

男性	164
女性	121
無回答	9

c. 年齢

65~69歳	56
70~74歳	84
75~79歳	78
80~84歳	54
85歳以上	19
無回答	3

d. 居住形態

戸建て住宅	272
マンション・アパート	15
その他	6
無回答	1

e. 建築・改装年

明治以前	7
明治~昭和20年	15
昭和21~40年	51
昭和41~60年	131
昭和61年以降	85
無回答	5

f. 家族形態

ひとり暮らし	19
夫婦のみ	109
子どもと同居	162
無回答	4

関しては平屋に居住する人を除くと歩行能力と変わらず一人で昇降でき、車いすの使用についてもほぼ同率で使用していない状況である。住宅内で杖や歩行器の使用に関して聞いた項目では使用していない人が若干減り、時々使用している・いつも使用している人がわずかではあるが他の項目より増えている。(アンケート内容は後頁に記載。)

(2) 住宅内の現況

1) 住宅内事故の経験

表3は、住宅内での転倒などの事故に遭った経験の有無を表したものである。住宅内事故の経験については半数強が事故に遭っていると答えている。事故の具体的な内容をみると、「階段で足を滑らせた、つま

表2 健康状態

良好・問題なし	244人
生活に支障あり	40人
無回答	10人
合計	294人

表3 住宅内事故の経験(複数回答可)

階段(滑らせた)	50人
敷居等(転倒)	46人
廊下や部屋(転倒)	36人
玄関上がり框(転倒)	36人
玄関ポーチ(転倒)	35人
ドア(ぶつけた)	23人
家具(ぶつけた)	21人
その他	5人
事故に遭わず	131人

ずいたことがある」が一番多く、次いで「ドアの敷居やちょっとした段差で転倒または転倒しかけたことがある」が多く、「玄関の段差で転倒または転倒しかけたことがある」と「廊下や部屋で足を滑らせて転倒または転倒しかけたことがある」が3番目に挙げられていることから、段差による事故原因が上位を占めていることがわかる。アンケート対象者の1割の住宅には階段がないと答えていることと併せてみると、他の場所でもより階段での事故率の高さが顕著である。また、年齢別に事故経験をみると、前期高齢者の事故経験は6割弱であるのに対して後期高齢者の事故経験は7割に達しており、高齢になる程事故率が高くなっている。そして、後期高齢者では事故の内容も「廊下や部屋、玄関のポーチで足を滑らせて」「ドアや敷居のちょっとした段差で」が多く、生活動作として部屋を移動する際に事故に遭っていることがうかがえる。

2) 住宅内移動の全体評価

「あなたのお住まいは、全体的にみて、住宅内の移動が行いやすいでしょうか」の問いに対する答えは表4に示すごとく、「住宅内の移動がたいへんおこないやすい」が46%と多いが、「場合によっては、移動が行いにくいところもある」「全体的に、とても移動が行いにくい」を併せると、42%となり半数近くが住宅内移動に関して何らかの危険を感じていることが表されている。これを年齢別に表したものが図1である。これをみると65~69歳では「場合によっ

表4 住宅内移動の評価

たいへん行いやすい	134人
場合によっては行いにくい	107人
とても行いにくい	18人
わからない	15人
その他	2人
無回答	18人
合計	294人

ては」が半数を超えて一番多くなっている。「全体的にとても」を加えると、約6割が住宅内の移動に不便を感じている。しかし、高齢になるに従って住宅内移動が行いにくいと感じる割合が減っており、85歳以上になると25%がわからないと答えている。これらのことから、前期高齢者は家庭内の仕事を多くしている年代であり、住宅内での活動量が多い

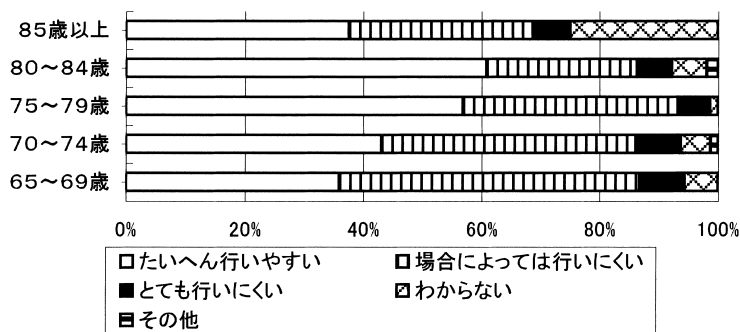


図1 住宅内移動の評価 (年齢別)

ため、生活動作に支障をきたす住宅内移動に不満を感じるのであろうと考えられる。また、建築・改装年代別に住宅内移動の評価をみたものが図2である。建築・改装年代が新しくなる程「住宅内の移動がたいへん行いやすい」の評価が多くなっている。特に昭和61年以降に建築・改装された住宅では55%と評価が高くなっているが、この年代頃から、後述の自由記述の欄に記述例があるように高齢化対応仕様の意識が高まっており、それ以前の住宅に比べて高齢者対応がなされている住宅が多くなっていることが要因となっていると考えられる。

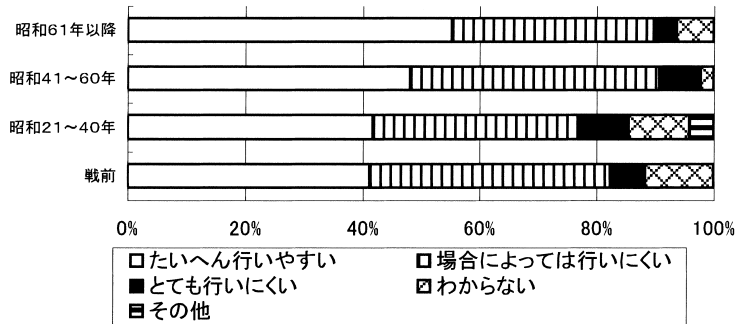


図2 住宅内の移動評価 (建築・改装年代別)

3) 気になる段差

「あなたのお住まいで、気になる(危険だと思う)段差がありますか」の問に約7割が気になる段差があると答えており、その段差を項目別にまとめたものが図3である。最も気になる段差は、玄関の上がり框であり、次いで階段、玄関の外側(ポーチ)の順である。これを建築・改装年代別にみると明治~昭和40年までの住宅においては玄関の上がり框が気になる筆頭

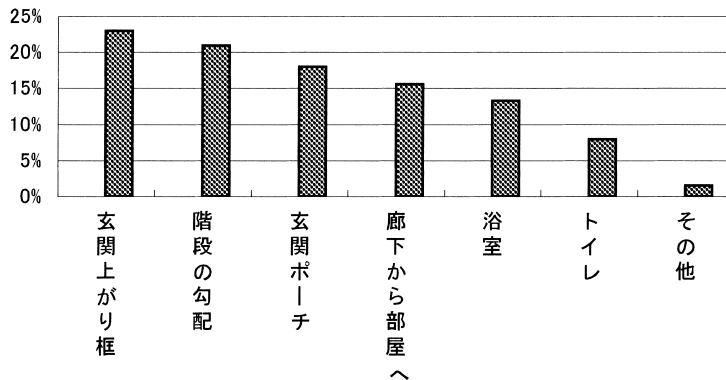


図3 気になる段差場所

であったが、昭和60年までの住宅では玄関外側（ポーチ）、玄関上がり框、階段がほぼ横並びの状態になり、昭和60年以降の住宅では、玄関外側（ポーチ）が他の2項目の倍の比率で最も気になる段差となっている。これは、最近の住宅では、玄関の上がり框が以前の住宅ほど高くなり昇降が楽になってきたことと、最近の住宅では住宅内の高齢者対策が進んでいるのに比して、玄関外側のポーチ部分はまだまだあまり考慮がされていないことに因子があると考えられる。また、年齢別に気になる段差をみると図4のように段差の種類に大きな差はみられないが、「気になる段差はない」が年齢を増すごとに増えていることがわかる。これは、後述する「手すりを付けている場所」の問に対してと同様に、後期高齢者の中には、自分は大丈夫と思っている、あるいは住宅とはこのようなもの（高齢者対応の住宅を知らない）と思っている人がいるためと考えられるが本アンケートでは、そこを明らかにする項目の設定をしていないので、今後の課題として次の調査で説明を試みたい。

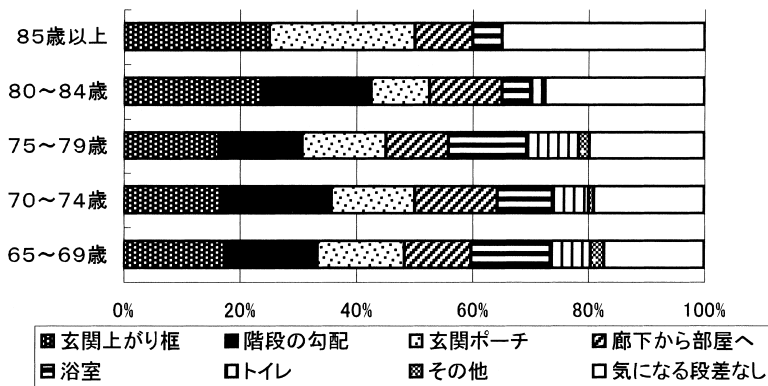


図4 気になる段差場所（年齢別）

4) 手すりの有無と使いやすさ

「あなたのお住まいで、手すりを付けている場所がありますか」の問をまとめたものが図5である。この図から手すりが付いているのは階段が最も多いが、階段は高齢者対策ではなく付ける場合も多いので、ここでは階段以外の手すりについて分析している。階段以外では、トイレ、浴室の順となっている。このアンケートでは、手すりの設置場所として5つの場所（階段を除いた数）を提示し、その他として具体的に記入してもらう方式を用いているので、設置場所の数をみると図6のごとくで、設置場所5ヶ所は平成11年、同9年、昭和53年に建設された住宅である。設置場所4ヶ所、3ヶ所とも建築・改装年代が新しく、設置場所はトイレ、浴室、玄関、廊下の順になっている。手すりの設置位置は3ヶ所設置の一軒がわからないとしている以外の全員が使いやすいとしている。設置箇所2ヶ所の内訳をみると、トイレ・浴室26、玄関・浴室2、玄関・廊下、洗面・浴室、玄関・トイレが各1となっている。この中で、トイレ・浴室で「使いやすさ」について、わからないが1、洗面・浴室で必要ないが1以外は使い

やすいとしている。また、建築・改装年代をみると、トイレ・浴室以外の工事を必要とすると考えられる手すりを設置している住宅は昭和48年以降の年代のものである。

手すり設置箇所1ヶ所の住宅の内訳をみるとトイレ32、浴室21、玄関4、廊下2、洗面所1となっており、トイレと浴室が主となっている。この2ヶ所に手すりの設置が多いのは必要性からもあると言えるが、簡単に後付あるいは据え置きできる品が市販されている手軽さによる要因も大きいと言えるが、今回のアンケートではそこまでの詳しい質問事項がないので、この事項も今後の課題である。手すりの使い心地に関しては、「トイレ」の中では、1軒がわからない、2軒がやや使いにくいとしている。この2軒の建築年は昭和28年と同20年である。また、浴室の中では、2軒が使いにくいとしているが、建築年は2軒とも昭和14年である。

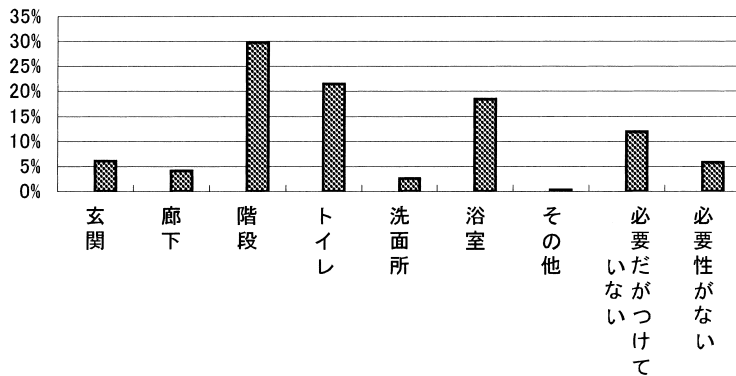


図5 手すりの設置場所

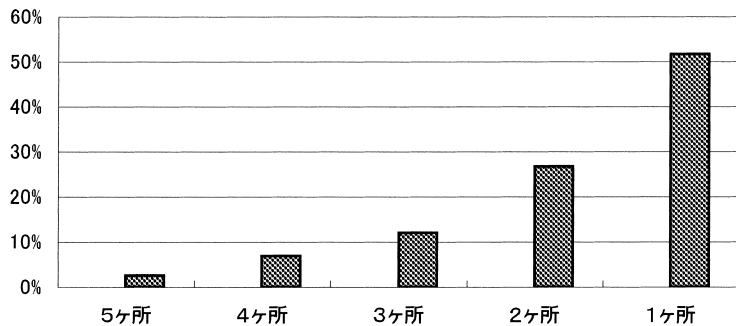


図6 手すりの設置数

5) 車いす・歩行器等を使用するにあたって

高齢で身体が不自由になった場合に、車いすや歩行器を使用するにあたって住まいの現況がどのようであると居住者が考えているかを把握するために以下の項目を設定した。これは、あ

くまでも居住者自身の主観的な意見である。

a. 「あなたのお住まいで、うす暗いために危険な場所（照明器具が少ない）がありますか」の問には、階段、廊下、トイレ、玄関の順でうす暗いとの答えがあった。

b. 「廊下や階段の幅は狭いと感じますか」には、44%が狭いとは思わない、29%が狭いと思うが、通行の支障にはならないと感じている。6%が狭くて通りにくいことがあると感じている。

c. 「ドアの幅は狭いと感じますか」には、58%が狭いとは思わない、20%が狭いと思うが、通行の支障にはならないと感じている。

d. 「ドアの開閉が行いにくいと感じますか」には、53%が開閉が行いにくいドアはないと感じ、17%が少し開閉しにくいドアもあるが、通行の支障にはならないと感じている。

e. 「あなたがよく居る部屋、または寝室からトイレは近くにありますか」には42%が比較的近くにあるとし、34%が隣接している、11%がやや遠くにあるとしている。「隣接している」と建築・改装年代の関係をみたが明らかな違いはなく、これは間取りや住宅規模を含めた調査を行わなければ明らかにできない課題であると考ええる。

f. 「地震や火災などの非常時にすぐに外へ避難する経路として、出入りのできる大きな窓（掃き出し窓）がありますか」には、57%が主な部屋には全て、外へ出ることができる掃き出し窓がある、20%が1～2つの部屋には、掃き出し窓があるとしている。

6) 今後の住宅内移動時の福祉用具使用と移動不安な場所

「あなたは今後、次の移動のための福祉用具を使用したいと思いますか」の項目をまとめたものが図7である。この図からも明らかなように、「わからない」、「福祉用具を使いたいとは思わない」がほぼ6割を占めている。福祉用具としては、杖の希望が23%であり、その他の利

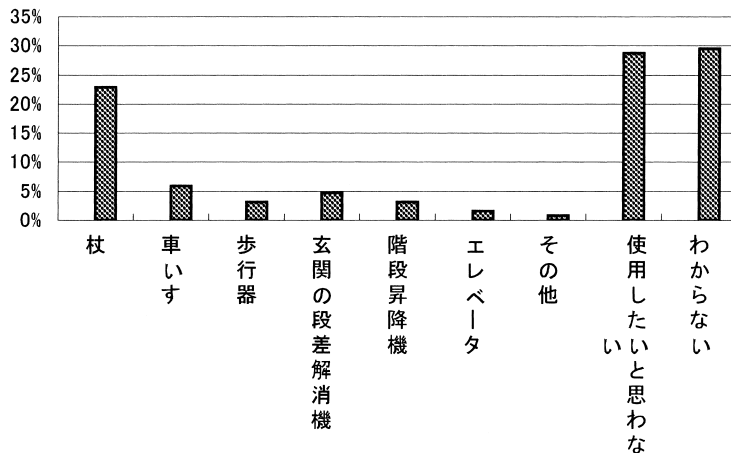


図7 将来の使用希望福祉用具

用は非常に少なくなっている。自分自身が使用するとしたら、杖くらいしか思い浮かばないあるいはその位の補助具ですませたいとの思いがあると考えられる。

「あなたは現在、大丈夫であるものの、将来、身体機能が低下した時、住宅内を移動する際に不安な場所がありますか」の項目をまとめたものが図8である。将来の住宅内移動に何らかの不安を感じる高齢者は、全体的にみると、8割近くに達しており「玄関の段差で転倒する不安」が最も多く、次いで、「階段で足を滑らせたり、つまずく不安」、「玄関の外側（ポーチ）で足を滑らせて転倒する不安」と続いている。4位に「特に不安に感じる場所はない」が挙げられており、ドアの敷居やちょっとした段差で転倒する不安と並んでいる。そこで、図9の「福祉用具を使いたいとは思わない・わからない」と「特に不安に感じる場所はない」との関連をみると、「福祉用具を使いたいとは思わない」人で、「将来不安に感じる場所はない」と答えて

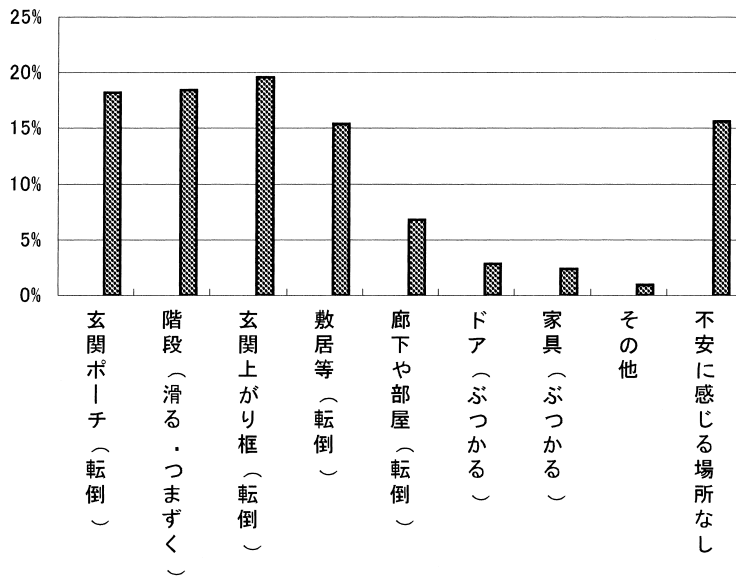


図8 将来の不安な場所

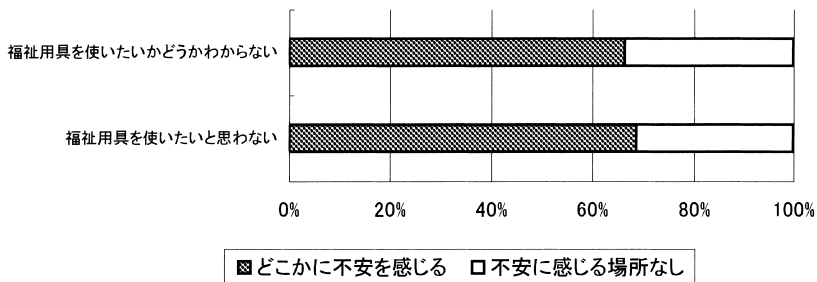


図9 将来の不安場所と福祉用具使用の関係

いる人は31%であり、「わからない」人では34%と、全体での割合23%より多くなっている。

これを年齢別にみたものが図10である。年齢比を比べると、「福祉用具を使いたいとは思わない」「わからない」とも若い年代の方が多くなっているが、高齢にも比が少し減るだけである。前期高齢者の時期であれば、具体的な身体の不自由さがまだなければこれらの項目を選ぶのも当然と考えられるが、後期高齢者がこれらの項目を選ぶ理由を把握するために男女比、建築・改装年代、健康状態などいろいろな項目とのクロスを試みてみた。その結果、健康状態は良好な人が多く、たまに杖をつくなど日常生活に支障があると申告しているのは3人だけであった。また、バリアフリー住宅に住んでいるからとしているのは85歳以上の1名であった。自由記述欄ではなく、福祉用具使用と不安な場所の有無を問う設問の横に特別に記入してあった文が示すように、「なってみなければわからない」「将来のことはわからない」と後期高齢者も思っているようである。そして、91歳の母親と同居している夫婦の夫（70～74歳）の記述の「今まで何事もなく過ごしてきたので、あまり考えたことがなかったがこれから考えなければならないようだ」との言葉のように、身体が不自由になった時に考えようと思っている傾向は後期高齢者に特に多いようである。これは、住宅とはこのようなものであるとの思い込みと、バリアフリーに関する知識が不足していることも一因であろう。このアンケートを機に考えたとの記入があることから推察できる。

家族形態と将来の住宅内移動に不安な場所の関連をみると、子どもと同居している家庭より、高齢者夫婦のみの家庭や一人暮らしの高齢者に不安感が大きい。

住宅内で転倒などの事故に遭った経験のある人は、やはりその場所を移動する際の不安を示している。

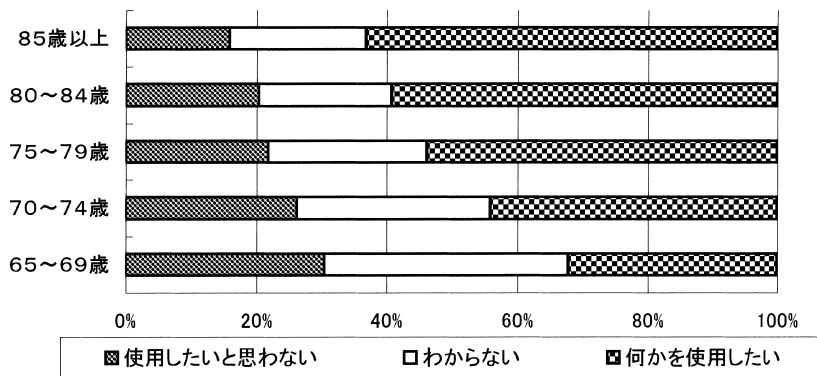


図10 福祉用具使用について

7) 住宅の安全性（バリアフリー）についての自由記述（294名中63名が記述）

自由記述のいくつかを列記する。

- ・段差のない住宅が理想

- ・田舎で大きい昔の家なので、あまり心配していない
- ・2階に非常口と屋外階段をつけたい
- ・家が古いので、地震等は怖いと思う
- ・高齢者住宅には、手すりが必要と考えるが、建物・敷地の関係で廊下の中が変わってくる
- ・必要が生じたとき、改装する
- ・今後の建築に際しては考えなければならないと思う

5. まとめと今後の課題

住居内事故の経験は、比較的健康的な高齢者でも半数以上が持っている。階段での事故が顕著である。

住宅内移動の全体評価は、「移動しにくい」が4割以上にも達する。年齢的には、活動量の多い前期高齢者による評価が低く、建築・改装年ではより古い住宅に暮らす高齢者の評価が低くなっている。

気になる段差は、約7割が「ある」とし、古い住宅においては玄関上がり框が最も気になる段差であるが、新しい住宅においては玄関ポーチが最も気になる段差である。

手すりの有無では、住宅内に手すりが1ヶ所以上ついている住宅が84%あり、使いやすさについては、ほとんどの人が「使いやすい」としている。

不自由になった場合の車いす・歩行器等の使用についてを考える場合、住まいの現況はさほど支障がないと感じている。

今後の福祉用具使用については、「わからない」、「福祉用具を使いたいと思わない」がほぼ6割である。将来、移動不安な場所は約8割が「ある」としている。以前事故にあった人は、事故のあった場所において将来も不安を感じている。

自由記述（63名記述）では、地震や火災などの緊急時における避難の不安（14名）や、必要になったら考える（8名）との意見が多く挙げられた。

高齢者の評価を通した住宅内移動の実態は、活動量の多い前期高齢者にとっては、段差の大きな上下運動が障壁となり、身体機能の低下が大きい後期高齢者にとっては、段差のあまりない水平移動も障壁となっている。年老いても住み慣れた自宅での暮らしを望む高齢者は多く、住宅内移動の安全性の確保のニーズは非常に高い。しかし現状として、バリアフリーに関する知識や高齢者対応の住宅をあまり知らない高齢者（特に後期高齢者）は、住みにくくてもこのようなものとの思い込みで暮らし続けている。在宅福祉の推進を図り、住居内移動の安全確保のためにも、介護保険制度を利用した住宅改修、福祉用具など生活支援するためのさまざまな情報を普及させる必要がある。

今後は、住宅改修の実態と課題について、高齢者の評価を通してこれらのことを明らかにしたいと考える。

最後まで査読者の有益な注意に深く感謝いたします。

< アンケート内容 >

次の問にお答え下さい。あてはまるものの数字に○をつけて下さい。

- 問1 あなたのお住まいは、次のどれにあたりますか。
1. 戸建て住宅
 2. マンション・アパート
 3. その他()
- 問2 あなたのお住まいは、いつ頃に建てられましたか。または改装されましたか。年号に○をつけて()内に年を記入して下さい。改装をされた場合は、そちらの年を記入して下さい。
- 明治・大正・昭和・平成 ()年頃に / 建築した ・ 改装した
- 問3 あなたは、同居家族がおられますか。
1. ひとり暮らしである
 2. 夫婦のみで暮らしている(子どもとは別居している)
 3. 子ども世帯と同居している
- 問4 あなたは、住宅内での転倒などの事故に遭った経験がありますか。あてはまるもの全てに○をつけて下さい。
1. 玄関の外側(ポーチ)で足を滑らせて転倒または転倒しかけたことがある
 2. 廊下や部屋で足を滑らせて転倒または転倒しかけたことがある
 3. 玄関の段差で転倒または転倒しかけたことがある
 4. ドアの敷居やちょっとした段差で転倒または転倒しかけたことがある
 5. 階段で足を滑らせたり、つまずいたことがある
 6. ドアにぶつけたことがある
 7. 家具などにぶつかったことがある
 8. その他()
 9. いままで、事故に遭ったことはない
- 問5 あなたのお住まいは、全体的にみて、住宅内の移動が行いやすいでしょうか。
1. 住宅内の移動がたいへん行いやすい
 2. 場合によっては、移動が行いにくいところもある
 3. 全体的に、とても移動が行いにくい
 4. わからない
 5. その他()
- 問6 あなたのお住まいで、気になる(危険だと思う)段差がありますか。あてはまる場所全てに○をつけて下さい。
1. 玄関の外側(ポーチ)
 2. 玄関の上がり框

3. 廊下から部屋へ入る段差
4. 階段（勾配がきつい）
5. トイレ
6. 浴室
7. その他（ ）
8. 気になる段差はない

問7 あなたのお住まいで、手すりを付けている場所がありますか。あてはまる場所全てに○をつけて下さい。

1. 玄関
2. 廊下
3. 階段
4. トイレ
5. 洗面所
6. 浴室
7. その他（ ）
8. 必要であると思うが、手すりは付けていない（問9へ）
9. 手すりを付ける必要性がない（問9へ）

問8 手すりを付けている場合のみ、お聞きします。その手すりは使いやすい位置についていますか。

1. 使いやすい
2. やや使いにくい
3. とても使いにくい
4. わからない

問9 あなたのお住まいで、うす暗いために危険な場所（照明器具が少ない）がありますか。あてはまる場所全てに○をつけて下さい。

1. 玄関
2. 廊下
3. 階段
4. トイレ
5. 洗面所
6. 浴室
7. その他（ ）

問10 あなたのお住まいで、廊下や階段の幅は狭いと感じますか。

1. 狭くて通りにくいことがある
2. 狭いと思うが、通行の支障にはならない

- 3．狭いとは思わない
4．わからない
- 問11 あなたのお住まいで、ドアの幅は狭いと感じますか。
- 1．狭くて通りにくいことがある（場所は _____ ）
2．狭いと思うが、通行の支障にはならない
3．狭いとは思わない
4．わからない
- 問12 あなたのお住まいで、ドアの開閉が行いにくいと感じますか。
- 1．開閉が行いにくいドアがある（場所は _____ ）
2．少し開閉しにくいドアもあるが、通行の支障にはならない
3．開閉が行いにくいドアはない
4．わからない
- 問13 あなたがよく居る部屋、または寝室からトイレは近くにありますか。
- 1．隣接している
2．比較的、近くにある
3．やや遠くにある
4．わからない
- 問14 あなたは今後、次の移動のための福祉用具を使用したいと思いますか。あてはまるもの全てに○をつけて下さい。
- 1．杖
2．車椅子
3．歩行器
4．玄関の段差解消機（玄関の30cmくらいの段差を車椅子でも移動できるリフト）
5．階段昇降機（椅子に座ったまま階段を昇降できる機械）
6．エレベータ
7．その他の移動のための福祉用具（ _____ ）
8．福祉用具を使用したいとは思わない
9．わからない
- 問15 あなたは現在、大丈夫であるものの、将来身体機能が低下した時、住宅内を移動する際に不安な場所がありますか。あてはまる場所全てに○をつけて下さい。
- 1．玄関の外側（ポーチ）：足を滑らせて転倒する不安
2．廊下や部屋：足を滑らせて転倒する不安
3．玄関の段差：転倒する不安
4．ドアの敷居やちょっとした段差：転倒する不安
5．階段：足を滑らせたり、つまずく不安

- 6. ドア：ぶつかる不安
- 7. 家具：ぶつかる不安
- 8. その他 ()
- 9. 特に不安を感じる場所はない

問16 あなたのお住まいで、地震や火災などの非常時にすぐに外へ避難する経路として、出入りの出来る大きな窓（掃出し窓）がありますか。

- 1. 主な部屋には全て、外へ出ることの出来る掃出し窓がある
- 2. 1～2つの部屋には、掃出し窓がある
- 3. 掃出し窓はない

問17 あなたが日頃、住宅の安全性（バリアフリー）について考えておられることがあれば、下の空欄に自由にお書き下さい。

問18 最後にあなた自身について、お聞かせ下さい。

- 年令
- 1. 65～69才
 - 2. 70～74才
 - 3. 75～79才
 - 4. 80～84才
 - 5. 85才以上

- 性別
- 1. 男性
 - 2. 女性

健康状態（日常生活に問題がありますか）

- 1. 良好・問題なし
- 2. 生活に影響がある

（病状 [差し支えがなければ] :)

歩行能力（住宅内の移動について）

- 1. 一人で歩ける
- 2. 一人で歩けるが、危険がないか見守ってもらう必要がある
- 3. 歩行には、介助が必要である
- 4. 歩行できない（車椅子などの使用、座り姿勢の移動等を含む）

階段（住宅内）の昇降について

- 1. 一人で昇降できる
- 2. 一人で昇降できるが、危険がないか見守ってもらう必要がある
- 3. 階段の昇降には、介助が必要である
- 4. 階段の昇降ができない
- 5. 住宅内に階段がない

車椅子の使用（住宅内で）

- 1．使用していない
- 2．時々、使用している
- 3．いつも使用している

杖や歩行器の使用（住宅内で）

- 1．使用していない
- 2．時々、使用している
- 3．いつも使用している

引用文献

- (1) 資料：厚生労働省大臣官房統計情報部「人口動態統計」
- (2) 資料：厚生労働省 介護保険事業状況報告月報

参考文献

- 久保智恵子，大西一也著：高齢者のための住宅改修に関する基礎的研究その1 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 2002
- 日本建築学会編 高齢者のための建築環境 彰国社 1995
- 棚木保匡編 介護保険に係る住宅改修 実践事例演習テキスト 厚有出版 2002

〒483 - 8086 愛知県江南市
高屋町大松原172番地
愛知江南短期大学
生活科学科